

児童文学から未来へ ⑥

広がっていく「物語」もしくは「読解」の個別性について

井上乃武

今回は、物語読解の可能性について少し考えてみたいと思います。連載中は不本意なことばかりでしたが（まさか連載期間中に三回も入院するとは思いませんでした）、文章の内容が不十分なのはやむを得ないことだと考えています。一年間どうもありがとうございました。

1 潜在する「物語」

前回のつづきというわけでもないが、実在しない（作者によって選ばれなかった）物語について論じるとは難しい。はじめて乙骨淑子『ピラミッド帽子よ、さようなら』（一九八一）を読んだとき——テキストは『乙骨淑子の本』（一九八六、全二巻）だったのだが——、私はこのあと一冊かけてアガルタの秘密が明らかになるはずだったのだろうと思った。だが、実際の物語は未完（一九八一年に刊行された初版には結末が存在したが現在は削除されている）であり、私の推測はたんなる一読者の感想でしかない。ある

いは那須正幹『屋根裏の遠い旅』（一九七五）を読んだときも、現実の世界から枝分かれしたもう一つの世界の住民たちが自分たちの世界を革新する——それは自らのオリジンリティを主張することでもある——物語を夢想したのだが、実際の物語は省平が新たな世界で生きていく決意を固めたところで終わっており、私の想像は何の裏付けも持っていない。やはり、批評や研究において、「実在しないもの」について考察することは不可能なのかもしれない。

その意味で、長谷川潮「小人像は中途転換した」（『日本児童文学』一九七七年一月号）は、非常に興味深いといえる。この評論は、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（一九五九）冒頭の「物語のまえに」の内容が作中で有効に機能していないことに着目している。長谷川によれば、この作品は、森山ゆりの物語として完結せねばならなかった。そして、小人たちは当初死にゆく存在として構想された。この作品は、死んでしまった小人たちの物語を端緒として